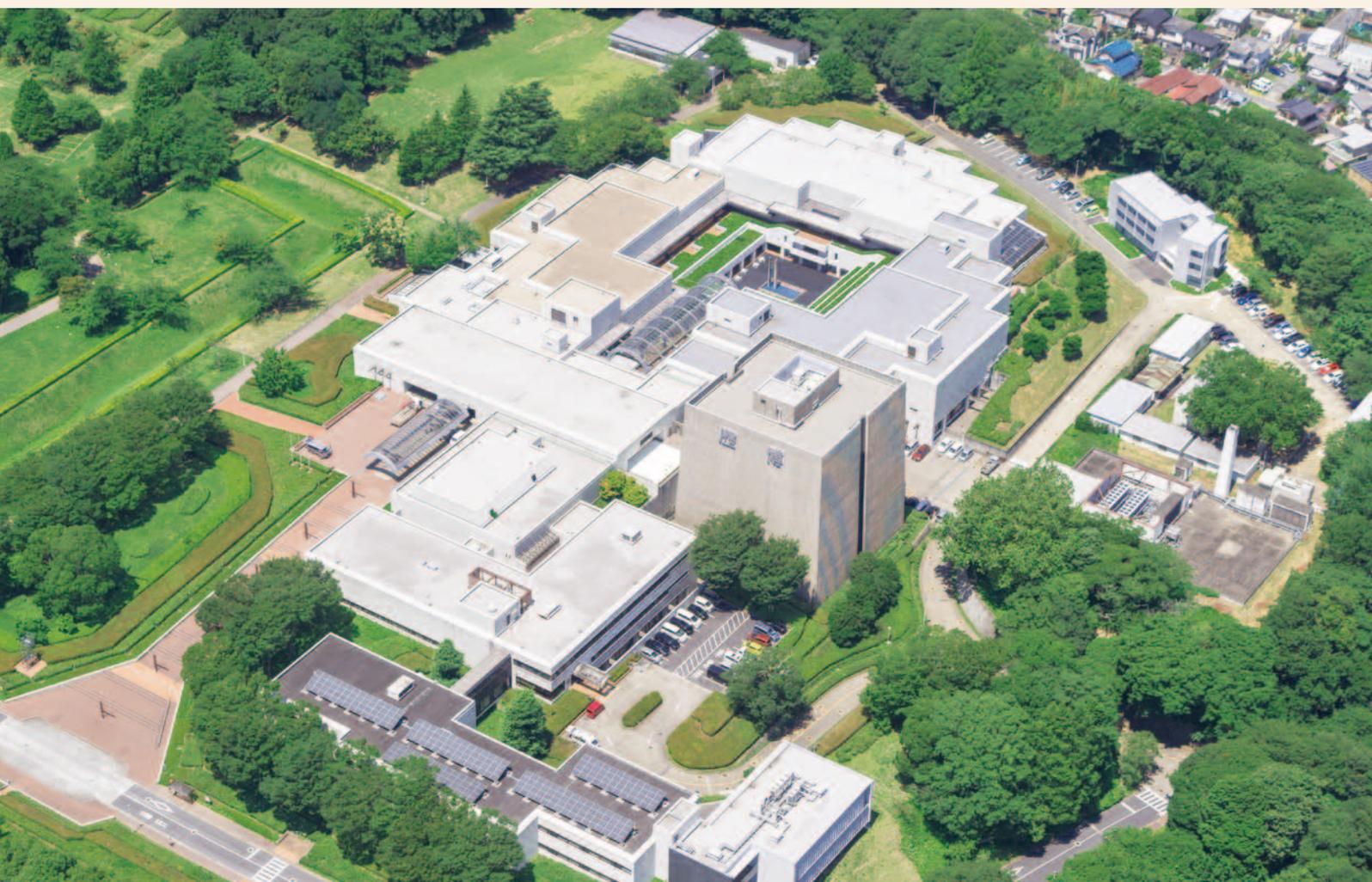


NEWS LETTER

日本の歴史研究を次のステージへ

VOL. 1
2016.09



CONTENTS

■ご挨拶	国立歴史民俗博物館館長 久留島浩	2
■メタ資料学研究センター設立の経緯	メタ資料学研究センター長・研究代表者 西谷 大	2
■国立歴史民俗博物館共同研究 「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」		
・総合資料学とは何か	研究副代表者 後藤 真	4
・これまでの活動		
ワークショップ1 第1回	ワークショップ1代表 後藤 真	6
ワークショップ2 第1回	ワークショップ2代表 三上喜孝	8
台湾訪問と調査	メタ資料学研究センター 渋谷綾子	10

・連携機関における活動のご紹介		
東京大学史料編纂所の研究活動と総合資料学	東京大学史料編纂所 山家浩樹	11
「日本の遺跡出土大型植物遺体データベース」の概要と意義	千葉大学大学院園芸学研究科 百原 新	12
一枚の写真から広がる世界 ―総合資料学の試み―	千葉県立中央博物館 島立理子	13
■研究メンバー一覧		14
■総合資料学研究センター・メンバーのご紹介		15
■2016年度 年間予定表		裏表紙

歴博発、日本の歴史研究を 次のステージへ

ご挨拶



国立歴史民俗博物館館長
久留島 浩

総合資料学への糸口

「総合資料学ニューズレター」の発信を始めるにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

国立歴史民俗博物館は、日本の歴史と文化に関する研究を組織的かつ持続的に推進するために1981年に設置された大学共同利用機関です。その使命は、人類の歴史的営為が複雑に絡み合った現代社会において、自ら未来を展望することのできるような歴史観・歴史想像力の獲得と、歴史認識を異にする人々の相互理解の実現に寄与することにあります。世界の各地でさまざまな格差が広がるなか、国家や民族、宗教間の争いは絶えるときがありません。地球環境も深刻で、言わば地球的規模で自分たちの未来を予測すること、夢をもって語ることが困難になっている現在だからこそ、これまでの自らの歴史を「展示」

などを通して主体的に学ぶことが求められているのだと思います。そのために、**歴史博物館を持つ大学共同利用機関として「何をなすべきか」**、が問われているのだと考えています。

わたしたちは、これまで、文献史学・考古学・民俗学および自然科学を含む関連諸学と協業し、学際的で基盤的・先進的な日本の歴史と文化に関する研究を、現代的視点と世界史的視野のもと、大学をはじめとする国内外の研究者とともに、すなわち学界コミュニティの協力のもとで推進してきました。そのなかで、資料そのものに人文社会科学的な分析だけでなく自然科学的な解析の結果をも付与することで、より豊かな学術的情報を持つ「歴史文化資源」として活用できるようにし、この資源の分析成果や共同研究の成果を展示というかたちで表現（歴史叙述）することによって、「**研究の可視化**」を進めてきました。この一連の過程のなかで、「**歴史研究をさらに「高度化**」できるのではないかと考えています。わたしたちはこのような資源・研究・展示という3つの機能を有機的に連携させた研究理念・研究方法を「**博物館型研究統合**」と呼び、この理念・方法を学界と共有してきました。

本年から6年間の第3期中期目標・中期計画では、この「博物館型研究統合」に磨きをかけ、新しい「異分野連携・融合」のモデルケースたりうる新学問分野として「総合資料学」を構

メタ資料学研究センター設立の経緯



メタ資料学研究センター長・
研究代表者

西谷 大

きっかけ

「総合資料学」を研究として立ち上げようとした直接のきっかけは、3.11東日本大震災である。大学や博物館は、自然災害と人との関係の歴史に関わって、災害のなかで失われた資料や逆に残された（救済された）資料をどのように把握し、「記録」化を行うかという課題に直面した。そして研究者だけでなく、一般市民に対して、大学や博物館等の資料を公開し「共有

化」を行う必要性を強く感じた。

例えば、東日本大震災（2011年）では、津波により岩手県陸前高田市立博物館で約40万点の資料が被災、また、宮城県石巻文化センターでは十数万点の資料が被災。奄美豪雨（2010年）では、原野農芸博物館で約1万点の資料が被災。山口島根豪雨（2013年）では山口県・須佐歴史民俗資料館で本館展示室、附属益田家住宅が浸水し、歴史民俗資料が多数被災、台帳も水没し700点程の資料が被災。日本学術会議による「文化財の次世代への確かな継承—災害を前提とした保護対策の構築をめざして—」（2014年6月24日、日本学術会議、史学委員会、文化財の保護と活用に関する分科会）においては、文化財データベースの構築が強く求められている。また全国歴史民俗系博物館協議会*の加盟館からも博物館資料の保存と活用について、多くの期待を寄せられている。



築しようと考えております。昨年度、メタ資料学研究センターを発足して活動を始めましたが、4月からはこの新学問分野創成事業を本格化しております。

大学（大学博物館や図書館も含む）や地域の歴史民俗系博物館・総合博物館には、古文書などの文献史料にとどまらず、考古遺物、民具など生活文化を反映した「モノ」資料から植物標本や動物骨格のような自然史資料まで、多様な資料が収蔵されています。さらに、映像や伝承、聞き取りなどの形態の情報も蓄積しており、いわば歴史学研究の基礎資料の百貨店とでもいえるべきところですが、しかしながら、多様かつ大量であるがゆえに、この大学・博物館の資料に歴史学研究者以外の方がアクセスすることは容易ではなく、それが文化系・理科系を問わず多様な研究を阻害する要因になってきました。この阻害要因を取り除き、大学・博物館の資料をさまざまな分野での研究で使えるようにすることが、歴史学研究を新しいものにするためにも、大学や博物館をより活きた存在にするためにも必要なことであると考えます（**共通のデータとなる資源情報のポテンシャルの向上を前提とした「オープンサイエンスの推進」と知の基盤強化**）。

そこで、わたしたちは、できるかぎり多くの大学と協定を結びながら、大学内に集積された多くの資料を共有化して新たな

研究・教育の資源として活用できるようにしたいと考えています（**大学との連携強化**）。また、多くの大学では、大学を取り巻く地域社会の資料をも調査・研究あるいは収蔵して地域社会のなかで大学が果たすべき責任を果たそうとし、地域の博物館との連携も不可欠になっています。歴史博物館を持つ大学共同利用機関という強みを持つわたしたちは、大学と博物館の相互の資料を結びつけ、大学における歴史学および地域社会についての研究・教育機能を強化する条件を整備することで（**大学の機能強化**）、新たな研究を進めることができると考えています。さらに、外国の大学・研究機関（博物館）にも多くの日本関連資料が眠っていますので、こうした大学・研究機関（博物館）などとの協定に基づく学術研究交流を進めて、「総合資料学」をよりグローバルな性格のものにしていくつもりです。

とはいえ、「総合資料学」の姿は未だはっきりしておりません。より多くのみなさまと一緒に、この研究事業を進めていくことで、「見えるかたち」の成果を出していく所存でございます。このニュースレターは事業をどの方向に進めるかという「糸口」（きっかけ）を提供・共有するために発信します。みなさまの積極的なご協力・ご参加をお願い申し上げます。

しかしさらに深刻な問題は、災害以外でも社会変動により地域の歴史・文化資源が日々失われていることである（海外流出：世界経済の地位変化による文化遺産の海外流出、国土の無住化：2050年には人口減により国土の60%は無居住地域 [国土交通省による予測]、地域社会の変動：グローバル化による地域経済の変化・人の移動）。

目指すもの

こうした状況に鑑みデジタルアーカイブ化、ネットワーク化を図り、資料の確実なバックアップ体制を構築しつつ、資料の活用を高めることは極めて緊急性が高い。さらに大学共同利用機関である国立歴史民俗博物館が、大学、大学博物館、博物館等との接点となり協力しながら、それぞれの環境を有機的に活用する具体的方法を創出する必要があると考えた。

しかし、単にバックアップするだけでは、資料の保存にはつながらない。収蔵された資料を、「活きた」資料、つまり活用される資料群に変えていく研究、これが総合資料学の目的である。

大学や博物館が収蔵する資料は国民の財産であり、資料の保存、活用のために研究を行うのは当然である。単に資料データをバックアップする体制を構築し相互活用するだけでなく、資料の保存・研究と公開・活用までを総合化し、博物館と大学、一般市民とを結ぶ新たな資料活用の研究が今求められている。

*3.11東日本大震災では、多くの博物館や文化財も被害を受け、復旧の事業が行われた。全国の歴史・民俗系博物館もさまざまな救援活動に携わってきた。このなかで浮かび上がってきた一つの問題は、科学系、美術系、動物園・水族館などの館が、それぞれの館種別組織を持っているのに対して、歴史・民俗系だけは、全国的な組織がないことである。歴史・民俗系といっても、それぞれの施設の設置目的や設置主体、対象とする地域や時代、分野等は様々である。同会は、有形無形の文化資源の保存と活用に努めるという共通の目的を持つ博物館に幅広く参加してもらい、相互の交流と連携をはかることによって、歴史・文化がそれぞれの地域社会の基盤として不可欠であるという理念と、その実践の貫徹を目指している。この趣旨に賛同した651館によって、平成24年6月14日に設立集会を開催し、全国歴史民俗系博物館協議会を発足させた（2016年9月現在748館）。

総合資料学とは何か



研究副代表者
後藤 真

「総合資料学」とは、主に大学や歴史系博物館が持つ資料を多様な形で分析・研究するための学問である。多様な「モノ」資料を時代・地域・分野等によって分類し、分野を超えた視点から統合的に分析することで、高度な共同利用・共同研究へと結びつける。この日本の歴史資料の活用による、人文学・自然科学・情報学の分野を超えた新たな日本史像の構築、学問領域の創成を目指している。「総合資料学の創成」のために、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）では「メタ資料学研究センター」を立ち上げ、さまざまな検討を進めている。

歴史に関わる大学の組織や歴史系博物館といえども、多種多様な資料を抱えている。古文書や、考古遺物は無論のこと、自然科学に関わる植物・昆虫標本、さらには技術史に関わる資料などを抱えていることも珍しくはない。大学博物館であれば、研究者の研究の過程で生まれてきたノートなどの中間生成物も存在する。これらの多様な資源を用いることで、歴史研究を今まで以上に多様な分野から見ていくことを目指している。目線を変えて、一つの資料を見ても、扱う研究分野により資料の見方は異なる。このような「見方」の多様性について検討することで、より多くの分野の研究者に資料をひらくことも、一つの眼目としている。

この総合資料学の目的を達成すべく、三つのワークショップを行っている。

ワークショップ1では、資料から出てくる多様な情報を、新たに情報基盤環境として整備するための研究を行っている。研究に基づいて抽出・蓄積した資料について、外部からアクセスする環境を整える検討を行う。例えば古文書であっても、その見方によって、多様な側面が浮かび上がる。歴史学の立場からは、古文書は内容に加え、誰から誰へ伝えられたのか、どのような文脈の中で出されたのかといった、当時の複雑な時間的・空間的・社会的文脈の中に位置づけられることになる。「古文書そのもの」に焦点をあててみると、例えば文書の書かれ方、文体などについて分析を加えることもある（語学史）。さらに要素を分解し、一文字単位になった場合には、語学研究の中でも、文字研究の分野の知見を求めることとなる。

より細かくは（日本であれば）墨・紙などの情報にまでたどり着く。これら墨・紙の材質を分析するためには、技術史的な視点を欠くことはできない。また、紙などの材料である植物の利用などに踏み込んでいけば、当時の自然環境を検討するための重要な材料ともなる。これらについては、自然科学との協業によって多くのことが明らかになる。

このように、古文書一つをとってみても、検討すべき要素は多種多様である。こうした、多分野型の研究情報を蓄積した情報基盤の構築を目指している。また、研究機関によっても、資料目録は少しずつ異なっている。それらを踏まえ、情報系の研究者と各分野の研究者がコラボレーションし、多分野・多機関の研究の資料を情報基盤上で表現することを目指す。

これらの情報を表現するためにLinked DataとIIIFの手法を用いる。Linked Dataとは多様な目録情報をリンクでつなげることであり、より複雑な歴史に関するデータの表現を可能とし、また多様な目録を見つけ出すためのデータベースとなる。IIIFは世界的な画像流通の国際標準であり、この規格を活用することによって、さまざまな研究の画像情報を共有することができる。

ワークショップ2は、「モノ」としての歴史資料に注目し、文系・理系の研究者が集散的に研究討議するものである。一つひとつの資料から今まで以上に豊かな情報を引き出し、それをさまざまな学問分野に還元する。構築された情報基盤を活用し、実際に文理の融合研究を実施、研究事例の蓄積を行う場である。具体的には、一つの課題と資料を設定し、異なる分野からの解決方法のアプローチを検討する。一つの資料からどのような歴史・文化が解明できるのか、異分野による研究モデルの構築を行うのが目的である。

2016年度からは、『れいとうかくしゅうこちやう 聆涛閣集古帖』（歴博所蔵）という資料をスタートアップの対象としている。『聆涛閣集古帖』は、文書・金属製品・木製品・地図・度量衡など、江戸時代の人物が過去の情報を多数収録したものである。当時の「百科事典」であり、「江戸時代の総合資料学」を資料で体現したものであるといえる。これらの情報を多様に分析すると同時に、他の資料との関係性等を分析する。この資料に関してはIIIF

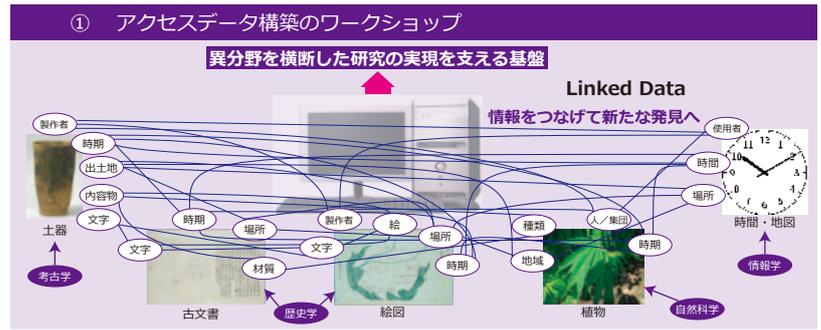
のデータとしても実験的に導入を行う。

ワークショップ3は、大学や博物館等とともに、「総合資料学」に基づく研究成果を大学や地域社会に還元するモデルを作る。ワークショップ1及び2の成果をもとに、各大学・博物館等を通じて地域歴史像を解明し、研究成果を発信するとともに、教育プログラム・展示などのアウトリーチを行う。

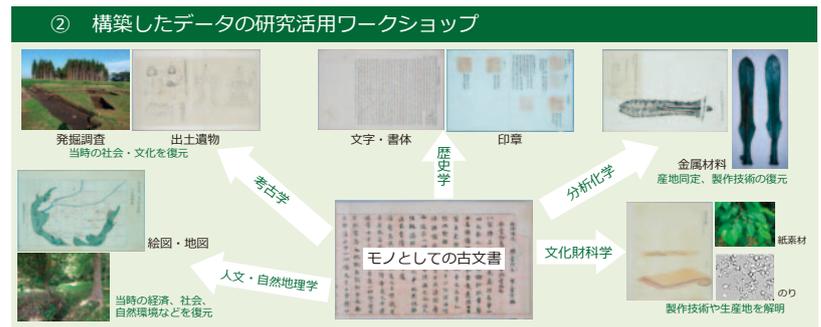
具体的には、地域の大学等と連携し、総合資料学の情報基盤や研究手法を活用することで、より粒度の細かい地域の歴史・文化研究の支援を行うことを目指している。また、その際に各地域の博物館資料情報を活用し、大学と博物館が一体となって文理を問わない研究体制を立ち上げることで、地域の新たな歴史像を引き出すことができると考える。ワークショップ3は、地域の歴史を解明する「場」を提供することで、各地域の文化や課題の解決に資することを目指していく。

以上の三つのワークショップを整理すると、研究の入り口であるデータの構築と、大学共同利用機関として他の大学とのデータの共有をワークショップ1が、データを用いた文理融合型研究プロセスをワークショップ2が、研究成果の出口であり社会との連携部分をワークショップ3が担う構造である。これは1→3という一方的なものではなく、連携したからこそ出てくる要望を研究に還元する、研究の知見をデータに反映させるといった循環の構造を作っている。この新たな歴史像を作り出す、「場そのもの」を、私たちは「総合資料学」と位置付けている。

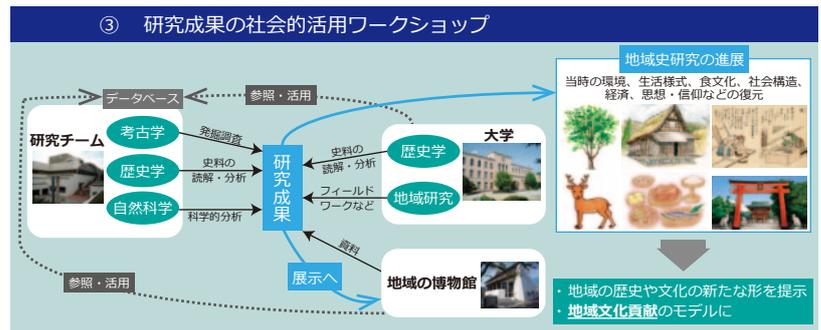
メタ資料学研究センターでは、多くの大学や研究機関・博物館との連携を行い、研究を進めることを目指している。



ワークショップ1

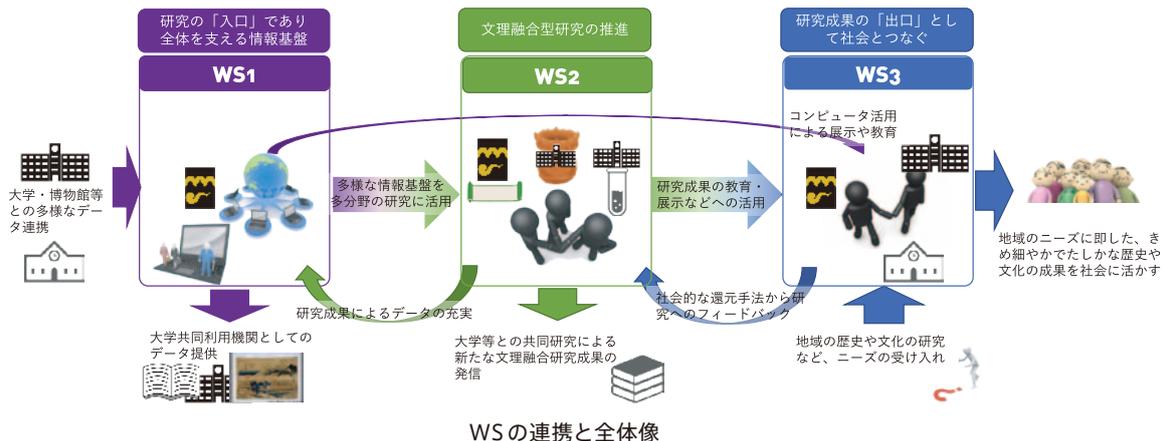


ワークショップ2



ワークショップ3

人文科学・自然科学・情報工学など、分野を問うことなく、歴史資料に関わる研究で多くの貢献ができれば幸いである。また、歴史に関わるモノ資料の融合型研究を目指している各機関は、当センターとの連携を検討していただければ幸いである。



これまでの活動

ワークショップ1 第1回

ワークショップ1代表 後藤 真

日時 2016年5月22日(日) 13:30~17:00

場所 国立歴史民俗博物館 大会議室

2016年5月22日、総合資料学で行われる3つのワークショップの皮切りとして、ワークショップ1が開催された。

ワークショップ1は、資料から出てくる多様な情報を、新たに情報基盤環境として整備するためのものである。研究に基づいて抽出・蓄積した資料について、外部からアクセスする環境を整えるためのノウハウを分析・蓄積する。具体的には、ある資料について、複数の研究者が目録情報を作り、その考え方を説明する。

例えば、小判について、文献史学者が貨幣的な位置から検討を加える一方、自然科学からは「物質」としての検討が加えられることになる。分野によって研究の目録は異なるものであり、研究者ごとにさまざまな目録を作ることになると考えられる。また、研究機関によっても、資料目録は少しずつ異なっている。

それらを踏まえ、情報系の研究者と各分野の研究者がコラボレーションし、多分野・多機関の研究の資料を情報基盤上で表現することを目指す。これらの情報を表現するためにLinked DataとIIIFの手法を用いる。

2016年度はプロトタイプ構築を開始している。現在協定を進めている大学・博物館等のデータの連携実験を開始し、次年度からは大学・博物館等とのデータ連携モデルを公開する予定である。

今回の研究会では、現在進めているLinked Dataによる複数の異なる機関の目録についての検討を進めた。また、その際に入れるデータの概要についても検討をして、

次 第

13:30~13:45 挨拶

13:45~14:45 発表

- 1) 総合資料学全体の枠組みおよびワークショップ1における研究の方向性について

報告者：後藤 真 (国立歴史民俗博物館)

14:45~14:55 休憩

14:55~16:50 ディスカッション

- 2) 歴博のLinked Dataシステムプロトタイプの中討議

報告者：後藤 真 (国立歴史民俗博物館)

16:50~17:00 諸連絡

具体的なURIの決め方の手法などを検討した。

ほか、現在進めている、館内の資料情報の研究資源としての公開に向けての資料の紹介や、各地域の研究機関や博物館のデジタル化の状況調査の簡単なまとめ等も実施した。総じて、今後総合資料学で作成していく研究統合情報基盤の基となる議論となった。

ワークショップ1では、Linked Dataを中心とする大学・博物館資料の情報基盤構築の検討を中心に実施をしている。デジタル・ヒューマニティーズ/人文情報学の動向と密接にリンクしつつ、技術動向等を見極め、最も研究に使いやすい方法で、横断型の研究資料情報の提供を目指していく。

*Integrated studies of
cultural resource*



ワークショップ1の概要説明



ワークショップ2及び3との連携について説明



Linked Data 実現のための技術的課題について討議

ワークショップ2 第1回

ワークショップ2代表 三上 喜孝

日時 2016年6月5日(日) 13:30~17:00

場所 国立歴史民俗博物館 第一会議室および第一調査室

2016年6月5日、総合資料学のワークショップ2を開催した。このワークショップ2では、博物館資料をさまざまな学問分野による多様な視点から研究を進めるための、方法の開発と共有化をめざす。初回となるこの回では、ワークショップ2の館内担当者が、これまで手がけてきた歴史資料研究の具体例を紹介しつつ、それを「総合資料学」に高めていくための展望と課題について報告した。

報告の後、館蔵資料である「れいとうかくしゅうこちょう 聆涛閣集古帖」を熟覧し、意見交換を行った。「聆涛閣集古帖」は、江戸時代後期から明治初年にかけて編纂された古物類聚の模写図録で、歴史学、考古学、美術史、民俗学、文化財科学など、さまざまな視点から研究を進めることができる可能性を秘めた資料である。一つの資料からいかに多くの情報を引き出し、それらを有機的に結びつけていくかが、総合資料学のめざす研究スタイルといえるだろう。

「聆涛閣集古帖」熟覧の後の意見交換では、資料そのものの基礎研究や類似の資料との比較研究の必要性、そしてそれらの研究成果を反映させたデータベース構築の重要性などが確認された。これらの研究を通じて、従来の「博物学」を超えた「総合資料学」の構築をめざしていくつもりである。



ワークショップ2の概要説明

次第

13:30~15:00 第一会議室

1) 趣旨説明「総合資料学・ワークショップ2の方向性について」

報告者：三上喜孝(国立歴史民俗博物館)

2) 報告「総合資料学の可能性」

報告者：小倉慈司(国立歴史民俗博物館)

15:00~15:15 休憩・移動

15:15~16:30 第一調査室

3) 館蔵資料の熟覧「聆涛閣集古帖」

16:30~16:40 休憩・移動

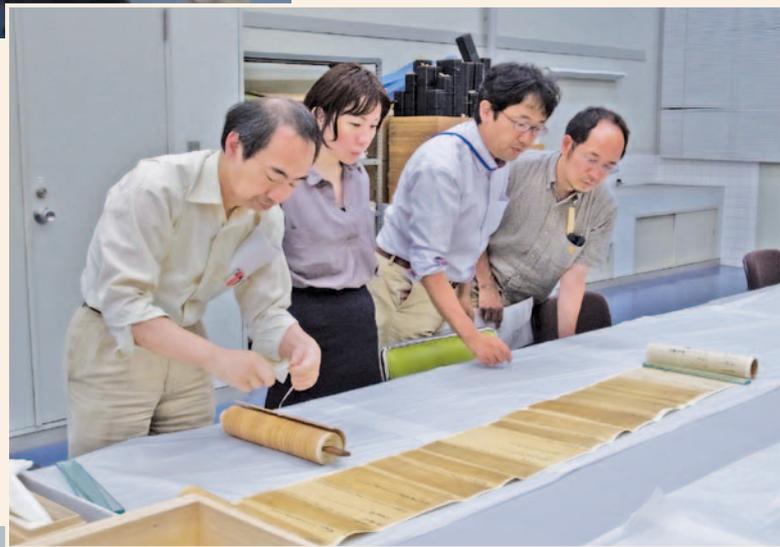
16:40~17:00 第一会議室

4) 意見交換

17:00 終了



「聆涛閣集古帖」の熟覧



文書形態について討議



「聆涛閣集古帖」の内容について討議

台湾訪問と調査

メタ資料学研究センター 渋谷 綾子

日時 2016年5月26日(木) 9:30~15:20

場所 国立臺灣歴史博物館

- 次第
- 9:30~ 9:40 挨拶 王 長華 (国立臺灣歴史博物館館長)
 - 9:40~10:20 「科技與博物館：博物館資源的調査與應用」 謝 仕淵 (国立臺灣歴史博物館)
 - 10:20~11:00 「可將博物館資料變換為『活資料』的『研究循環資料取得模型』實踐建構」
西谷 大 (国立歴史民俗博物館)
 - 11:10~11:50 「総合資料学のための情報システム基盤プロトタイプ」 後藤 真 (国立歴史民俗博物館)
 - 11:50~12:50 昼食休憩
 - 12:50~13:30 「博物館資料を活用した多分野横断研究の開発」 三上喜孝 (国立歴史民俗博物館)
 - 13:40~14:20 「資料をどう見るか？考古科学の立場から」 渋谷綾子 (国立歴史民俗博物館)
 - 14:30~15:20 総合討論 (司会：王 長華)

2016年5月25日~29日、メタ資料学研究センターのメンバー西谷・三上・後藤・渋谷の4名と管理部職員1名、ならびに千葉県立中央博物館島立理子氏の計6名で台湾を訪問した。今回の訪問の目的は、台南市の国立臺灣歴史博物館において、総合資料学に関する研究手法を紹介することと今後の事業の進め方について意見交換を行うこと、さらに、中央研究院歴史語言研究所と国立臺灣大學における人文系資料の状況調査を実施することである。

台南市の国立臺灣歴史博物館では、上記のスケジュールで総合資料学の紹介および協議が行われた。

まず各研究報告・話題提供が行われた後、今後の事業の進め方についての意見交換が行われた。国立臺灣歴史博物館の謝氏からは、同館の概要および資料情報の管理・運営について、また同館で行われているさまざまな研究の成果や展示などが報告された。国立歴史民俗博物館(以下、歴博)の西谷センター長からは、総合資料学の概要と今後の研究展開についての紹介が行われた。後藤教員からは、メタ資料学研究センターで現在構築中である情報システム基盤プロトタイプについての状況報告と今後の方向性、三上教員からは多分野横断研究の例として、「聆涛閣集古帖」の概要と「広開土王碑文」に関する研究紹介が行われ、筆者渋谷からは考古科学の立場からみた博物館資料と自然科学分析の事例研究を紹介した。

総合討論では、博物館資料にはさまざまなジャンル・種類があり、館と館をつなぐ際は各館のしくみを、国と国をつなぐ際は互いの文化を理解することがまず重要であることが、国立臺灣歴史博物館・歴博の共通意見として出された。考古遺物の復元を含む「素材分析」などのように、一つのテーマや資料に対する多様な情報を集めてシステムを作り、多分野連携の研究を進めていくこと、また、研究成

果を博物館の展示としてどのように結びつけていくかということについて、今後総合資料学で進めていく国際発信・研究連携のもととなる議論がかわされた。

さらに、国立臺灣歴史博物館の謝氏と研究員とともに台南市内の各種の文化遺産を巡検し、文化遺産の現状とそれらを取りまく保護・管理体制、今後のあり方について議論を行った。

台北市の中央研究院歴史語言研究所と国立臺灣大學では、各施設で展示されている人文系資料の見学を中心として、資料の状況調査を行った。



国立臺灣歴史博物館での討議



台南の文化遺産を現地研究者と巡検

連携機関における活動のご紹介

東京大学史料編纂所の研究活動と総合資料学

東京大学史料編纂所 山家 浩樹

東京大学史料編纂所は、明治維新时期までの前近代の日本史料に関する研究所で、史料を蒐集して研究し、またそれらを編纂して史料集として刊行することを通じて、日本史をはじめ日本を対象とする諸研究に寄与することに努めている。

史料編纂所が展開している諸事業には、総合資料学と連携するものも少なくない。国内外の史料蒐集、および史料研究から具体例を紹介したい。

総合資料学の構想には、大学や博物館などが保有する多様な資料の情報を集積するという意図が基底にあると理解している。史料編纂所は、前近代の日本史史料という、限定された分野を対象としているものの、明治10年代から、日本全国に散在する日本史史料を複製で蒐集し、さらに国外に所在する日本関係史料の蒐集にも努めている。史料編纂所の史料蒐集事業は、多様な場に伝存してきた資料情報を集約するという点で、総合資料学と連携していると位置づけることができるだろう。

近年では、共同利用・共同研究拠点「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」に認定され、公募による共同研究も加えて、史料蒐集と史料研究を推進している。これまでも多くの方々のご協力のもとに史料蒐集を遂行してきたが、より広い範囲での協力関係の構築を目指している。また、日本史研究者のほか多様な分野の研究者の参画を得て、異なる視点を融合して史料研究の新たな展開を図っている。史料の伝来した地域の研究者と共同研究を行い、シンポジウムや展覧会などを通じて地域に研究成果を還元することにも努めている。

蒐集した史料のデジタル画像は、所蔵者の権利を守るために原則としてweb公開は行わないが、史料編纂所の閲覧室で、Hi-CAT Plusというデータベースを通じて公開し、ひろく利用に供している。画像には、研究成果である史料に関する情報をメタデータとして付加している。

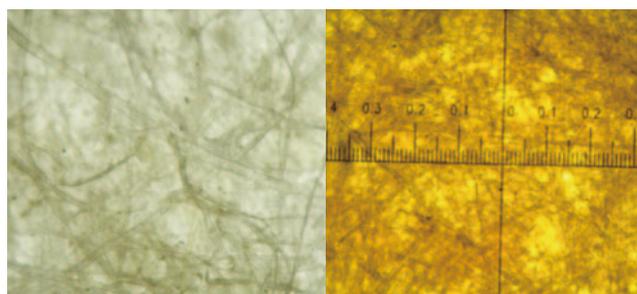
さて次に、史料研究の具体例として、「複合的史料研究」と呼んでいる研究をご紹介したい。「複合的史料研究」とは、従来行ってきた、文面の内容分析、あるいは形態など容易に看取しうる情報をもととした史料研究の成果と、自然科学の手法を導入して史料をモノとして分析する研究の成果

を、相互関連してあらたな史料研究を行おうというものである。モノとしての分析では、様々な分析機器を導入してデータを採取するとともに、製紙科学の知見を参考に、顕微鏡写真から紙質の解明を行っている。史料編纂所の教員・技術職員が協力して遂行している。

史料は成立当時の状態のまま伝来することは少なく、巻物に仕立てられるなど、多くの場合、現状ではモノとしての分析が困難である。史料を解体修復することが可能となれば、一時的に成立当時の状態となるため、モノとして分析する格好の機会となる。史料編纂所には史料蒐集の過程で多くの原本史料も蓄積されており、修理の機会を得た史料を素材として分析を進めている。昨年度までに、南北朝期の公家中院通冬の日記「中院一品記」の解体修理にあたり、モノとしての分析を行い、そのうえで紙の再現や筆法の研究を試みた。現在は、かつて島津家に伝来した国宝島津家文書のうち、主要な文書を成巻した「御文書」の解体修理を行い、モノとしての分析を進めている。これらモノとしての史料のデータは、データベースを構築して公開していく予定にしている。

総合資料学の試みは、分野を超えた多様な視点から資料を分析・研究してあらたな成果を導くものと理解している。複合的史料研究は、日本史史料に対象を限定しているため、総合資料学の大きな構想と安易に結びつけることはできないが、発想には共通する部分があるだろう。

史料編纂所は、総合資料学の構想と連携を取りつつ、日本史研究において更なる成果を挙げるべく努力し、成果を公開していきたいと考えている。



古文書料紙の顕微鏡写真例

「日本の遺跡出土大型植物遺体データベース」の概要と意義

千葉大学大学院園芸学研究科 百原 新 / 国立民族学博物館 石田 糸絵
国立歴史民俗博物館 工藤 雄一郎

平成28年4月より、国立歴史民俗博物館ウェブサイトで公開された「日本の遺跡出土大型植物遺体データベース」(https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/iss/db_param)は、日本各地の遺跡発掘報告書に報告された大型植物遺体(果実、種子、葉など肉眼で観察できる植物の遺体)の約63,000件の出土記録を網羅し、検索可能にしたものである。大型植物遺体の出土記録は、植物の栽培過程などの人と植物との関係史や、地域の植生史を明らかにする上で重要な資料である。1980年代以降、大開発に伴う低湿地遺跡の調査が活発化し、膨大な出土記録が調査報告書に掲載された。しかしながら、刊行された報告書が閲覧できる施設に限られているため、植生史資料として利用するには網羅的なデータベースの構築が必要不可欠であった。そこで、国立歴史民俗博物館の図書館にある約6万冊の遺跡発掘調査報告書の中から、大型植物遺体の分析例がある報告書約2500冊を抽出し、データベース化を行った。分類群(科名、和名、学名)、時代、都道府県、遺跡名などによる検索が可能で、検索結果は一覧表で出力でき、グーグルマップ上に分布を図示することもできる。検索結果や地図上の地点をクリックすると、そのデータの書誌情報を含む詳細な情報を得ることができる。

出土記録のデータベース化により、これまでも出土記録が集約されてきたマメ類や穀類、果樹などの栽培植物の一部だけではなく、それ以外の多くの植物の時間的・空間的分布や生業活動の変化との関係が明らかになりつつある。研究者間で情報を共有しやすくなったことで、研究者間で異なる植物の同定基準や、植物形態記載用語、検出方法の統一化が進むことが期待される。発掘や分析の際に各地域の各時代で検出すべき植物遺体が意識されるようになり、出土層位の正確な植物遺体記録が増えると考えられる。

このデータベースは、植物考古学や植生史研究だけではなく、地域の緑地管理や自然再生、歴史的景観のデザインにも必要不可欠である。現在の都市域や里山の植生は、縄文時代以降の生業生活の変化とともに大きく改変されてきた。近世のマツ植林を経て、現在ではスギ植林が人里の代表的な植生となっている。都市とその周辺では自然再生事業が盛んに行われているが、地域固有の生態系を回復さ

せる際に参考となる自然度の高い現存植生は極めて限られており、一旦破壊された後で再生した植生は、その地域にもともと存在した植生かどうか分からない。そこで重要になってくるのが、地域の植生史資料である。特に植物の種類が特定できる大型植物遺体からは、地域に分布しているどの植物が歴史的にみて重要で、保護すべき対象かがわかり、本来その地域に存在した植生を回復させるのに役に立つ。史跡等を中心に緑地を造成する場合でも、植生史資料に基づいて各時代の歴史的景観をより正確に復元し、そこに最もふさわしい植物を植栽することで、来場者に当時の生活環境や人と植物との関係を伝えることができる。

データベースの作成には、各報告書の大型植物遺体の分析・報告を含む章に加え、例言、抄録、出土層位に関する土器編年や放射性炭素年代などの絶対年代の記載をコピーし、それらに基づいて大型植物遺体の出土層位による時代区分を割り当てた。しかしながら、大型植物遺体を含む自然科学分析報告の多くは委託先から納められたまま報告書に添付され、そこでの層位区分が本編のそれと統合されていない場合もあり、正確な層位区分や年代が特定できないデータも多い。試料の時代区分が報告書から判断できない場合は、抄録に記載されている遺跡全体の時代が入力されている。さらに、上位の新しい時代の遺体の明らかな混入と考えられる場合もあり、植物遺体の同定の精度もまちまちで、誤同定と見受けられる場合も、報告書の記載どおりに入力している。本データベースはあくまで一次資料(発掘調査報告書)に辿り着くためのものであり、データには地理的・時代的な偏在や、多くの誤記録が含まれていることに注意が必要である。したがって、データベース利用者は、必ず一次資料に記載されている層序や写真、できれば保管されている標本を確認する必要がある。

詳細は、下記の文献を参照していただきたい。また、本データベースを利用して論文・報告書等を執筆する場合はこの文献を必ず引用していただきたい。

石田糸絵・工藤雄一郎・百原新 2016 日本の遺跡出土大型植物遺体データベース「植生史研究」24-1: pp. 18-24.

一枚の写真から広がる世界 ―総合資料学の試み―

千葉県立中央博物館 島立 理子

同じ風景を見ていても、人によって見える物は違う。

下の写真は昭和30（1955）年の千葉市花見川区検見川町の写真である。干潟がひろがっているので、海岸沿いの写真であることがわかる。かつて、東京湾岸には広大な干潟がひろがっていた。現在はそのほとんどが埋め立てられてしまって、その風景は大きく変わってしまった。

「失われてしまった風景が写されている写真」というだけで重要な資料であるということ間違いはない。しかしながら、この写真の価値はそれだけではない。風景と同様、写真もそれを見る人の知識や経験によって読み取れる情報が異なってくる。

浜一面に広げられている物に眼がいくだろうか、これは千葉市周辺でカワナと呼ばれる海藻で和名をアナアオサという。表面に小さな穴があいている。硬いためにあまり食用にはむいていない。広くアオサ海苔として販売されているものとは違う。このアナアオサは、現在でも非常に多く東京湾内に生息している海藻で、海岸に漂着して悪臭の原因として、海底に堆積してヘドロ化するなど環境問題となっている。

この写真で一面にひろげているのはなぜだろうか。このカワナは当時から放置しておくとも腐敗して、東京湾名産の貝類に被害を及ぼすことになることがわかっていた。やっかいな物だが、利用するためにこのように一面に広げているのである。硬いとはいっても食品として、窒素やリン酸を含んでいるため肥料として、あるいは家畜の飼料として利用された。干し上がったカワナは俵に詰めて出荷された。当時からやっかい者であったアナアオサであるが、当時は人々の手によって集められ利用されていたのである。

一面に広がるカワナの先のくぼみに眼を向ける人もいるだろう。千葉市の幕張、検見川、黒砂一带にはウタリと呼ばれる場所があった。ウタリとは干潟のなかに出来た窪地であり、引き潮でも水が残るのである。南風によってここにカワナが溜まったのである。

平成23（2011）年3月11日の東日本大震災の時、幕張、検見川一带の埋め立て地は液状化の被害にあった。同じ埋め立て地でも場所によって被害に大きな差があったのだが、事の真偽は別として被害の大小は埋め立て前のこのような

微地形が影響しているのではないかと地元で言われている。いずれにせよ、このような微地形があったからこそ、大量のカワナがこの地域に溜まったのである。

同じ東京湾でも木更津のアクアラインの金田インターチェンジの近く中島地区で聞いたカワナの話はこうだ。カワナは漂着するけれど、腐敗して困るほどではなかった。そして、漂着したカワナを乾かしておく、幕張あたりの肥料の仲買や問屋がとりに来たという。中島周辺にはカワナが溜まるような、ウタリのような微地形はなく、カワナの腐敗に悩まされることはなかったのだ。ここで興味深いのは、検見川・幕張の人々は、その地形ゆえに悩まされていたカワナを単なるやっかい者としてでなく、1つの商品として、遠く木更津まで仕入れに行くなど1つの商売としていたことである。

写真の手前の方をいくつかの視点で見ただけでアナアオサという海藻と東京湾の地形と人の生活が複雑にかかわりあっていることがわかる。これは、海藻や地形、民俗についての知識を出し合った成果である。

千葉県立中央博物館は約60名の違う専門をもった研究職員が所属する総合博物館である。来年度からその特徴をいかして、当館が所蔵する写真・絵はがきなどの画像資料を研究職員が共同で研究する重点研究を立ち上げる予定である。その研究によって、たった一枚の写真から様々なことが読み取れるに違いない。これも、総合資料学の1つの試みといえるだろう。



「検見川の打瀬船とカワナの地干し」
千葉県立中央博物館所蔵、林辰雄氏撮影

研究メンバー一覽 (氏名／所属／分担課題)

◎研究代表者、○研究副代表者、各代表・コーディネーター以外のメンバーは五十音順に記載

総括

久留島 浩 (国立歴史民俗博物館)

WS1

○ 後藤 真 (国立歴史民俗博物館) * WS1代表
宇陀 則彦 (筑波大学)
大向 一輝 (国立情報学研究所)
岡田 義広 (九州大学)
五島 敏芳 (京都大学総合博物館)
新 和宏 (千葉県立中央博物館分館海の博物館)
関野 樹 (総合地球環境学研究所)

高田 良宏 (金沢大学)
研谷 紀夫 (関西大学)
山田 太造 (東京大学史料編纂所)
百原 新 (千葉大学大学院)
荒川 章二 (国立歴史民俗博物館)
内田 順子 (国立歴史民俗博物館)
小池 淳一 (国立歴史民俗博物館)

WS2

三上 喜孝 (国立歴史民俗博物館) * WS2代表
渋谷 綾子 (国立歴史民俗博物館)
岩崎 奈緒子 (京都大学総合博物館)
小川 正人 (北海道博物館)
栄原 永遠男 (大阪歴史博物館)
山家 浩樹 (東京大学史料編纂所)
青山 宏夫 (国立歴史民俗博物館)

荒木 和憲 (国立歴史民俗博物館)
小倉 慈司 (国立歴史民俗博物館)
高田 貫太 (国立歴史民俗博物館)
原山 浩介 (国立歴史民俗博物館)
日高 薫 (国立歴史民俗博物館)
松田 睦彦 (国立歴史民俗博物館)

WS3

◎ 西谷 大 (国立歴史民俗博物館) * WS3代表
阿児 雄之 (東京工業大学博物館)
伊藤 昭弘 (佐賀大学)
奥村 弘 (神戸大学)
崎山 直樹 (千葉大学)
篠原 徹 (滋賀県立琵琶湖博物館)
島立 理子 (千葉県立中央博物館)

宮武 正登 (佐賀大学)
藪田 貫 (兵庫県立歴史博物館)
大久保 純一 (国立歴史民俗博物館)
齋藤 努 (国立歴史民俗博物館)
鈴木 卓治 (国立歴史民俗博物館)
村木 二郎 (国立歴史民俗博物館)

総合資料学研究センター・メンバーのご紹介



センター長

西谷 大 NISHITANI Masaru

研究部・考古研究系 教授

専門分野 東アジア人類史（東アジアにおける生業の歴史、人と自然の関係史）

文系は冬の時代である。目先の成果、金銭的利益がますます重視されるようになってきている。文系の学問の究極の目的は、人間学だと思っている。人間とはいったい何なのかと、常に問い続けること、これが今の現代に最も必要なことだと思っている。



小倉 慈司 OGURA Shigeji

研究部・歴史研究系 准教授

専門分野 日本古代史、史料学（主要研究課題：古代神祇制度の研究、禁裏・公家文庫の研究）

総合資料学とは何か、今回、機会を与えられて改めて勉強し始めると、自分の視野の狭さに恥ずかしくなってしまうますが、広く深く研究を進め、それを広範囲に発信するためにはどうしたらよいか、考えていきたいと思っています。



三上 喜孝 MIKAMI Yoshitaka

研究部 准教授

専門分野 日本古代史（主要研究課題：東アジア文字文化交流史、古代地域社会史、貨幣史）

「広開土王碑から落書きまで」。これが最近の私のモットーです。王をたたえた碑文も、中世の民衆が書いた落書きも、正倉院文書も墨書土器も、歴史を知るための重要な文字資料として同じ姿勢で向き合っています。



後藤 真 GOTO Makoto

研究部 准教授

専門分野 人文情報学・情報歴史学・総合資料学（歴史情報のデジタル化やデジタル・アーカイブ、総合資料学の構築など）

コンピュータで歴史学や人文学を見るというのは、新しい道具で古いものを見るという試みです。歴史学や人文学の最新の成果や、知識を世界に伝えることで、私たちの社会がちょっとでも生きやすいものになるならと思い、この仕事をやっています。



渋谷 綾子 SHIBUTANI Ayako

研究部 特任助教

専門分野 植物考古学、文化財科学（主要研究課題：先史時代人の植物利用と食生活の復元、植物食の健康への影響）

私は、石器や土器などの表面、遺跡の土壌、人骨の歯に付着した歯石に残るデンプンの粒子（デンプン粒）を取り出して、人間がどんな植物をどのようにして食料にかえたのか、その歴史と文化を明らかにする研究をしています。総合資料学では、考古科学の立場から歴史資料の素材分析を進めています。

2016年度 年間予定表

以下は開催予定のもの

2016

5/22 (Sun) ワークショップ1

(於：国立歴史民俗博物館 大会議室)

- 趣旨説明「総合資料学全体の枠組みおよびワークショップ1における研究の方向性について」
- 報告「歴博のLinked Dateシステムプロトタイプの集中討議」

5/25 (Tue)～29 (Sun) 台湾での調査

(於：国立臺灣歴史博物館・中央研究院歴史語言研究所・国立臺灣大學)

- *国立臺灣歴史博物館にて総合資料学の紹介および討議 (5/26)

6/5 (Sun) ワークショップ2

(於：国立歴史民俗博物館 第一会議室)

- 趣旨説明「総合資料学・ワークショップ2の方向性について」
- 報告「総合資料学の可能性」
- 館蔵資料の熟覧「聆涛閣集古帖」

6/30 (Thu)・7/1 (Fri) ポスター発表

(第19回大学博物館等協議会・第11回博物科学会 (東広島大会))

7/8 (Fri) ワークショップ3

(於：金沢商工会議所会館 研修室1C)

- *全国歴史民俗系博物館協議会年次集会へ参加
- 現地巡検 (金沢城公園)
- 報告会「博物館資料およびそれを用いた研究データを活用した博物館での展示・教育活動モデル構築について」
- 話題提供1「総合資料学の全体像とワークショップ3の位置づけ」
- 話題提供2「総合資料学における博物館資料データベースの地域活用に向けて」
- 話題提供3「『地域の学術文化の復興』と総合資料学」

9/12 (Mon) ワークショップ1

(於：東京大学本郷キャンパス 福武ホール)

- *日本デジタルヒューマニティーズ学会と共催の国際シンポジウム
- 講演1 “The Humanities, the Liberal Arts and the University in a Digital World”
- 講演2 “Academic Assets and Digital Archives”
- 講演3 “Making Database of City Life from Genre Paintings-Persons' Database of 16th Century Rakuchu-rakugai-zu Byobu (Scenes In and Around Kyoto Screens)”

9/14 (Wed)～17 (Sat) 2016EAJRS conference in Bucharest 参加・機関ワークショップの実施

10/23 (Sun) ワークショップ3 (於：国立歴史民俗博物館 大会議室)

11/13 (Sun) ワークショップ2 (会場未定)

12/9 (Fri) ワークショップ1 (会場未定)

2017

1/28 (Sat) か 29 (Sun) ワークショップ3 (会場未定)

2/11 (Sat) か 12 (Sun) ワークショップ2 (会場未定)

3/18 (Sat)・19 (Sun) 全体会議 (会場未定)

*2016/10/23以降のワークショップについては内容を調整中 (2016/9/30現在)

総合資料学ニュースレター 第1号 2016年(平成28年)9月30日 発行

編集発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館 メタ資料学研究センター

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地
TEL 043-486-4220 (直通) <http://www.metaresource.jp/>

印刷 株式会社 正文社